アンタッチャブル

〝ねえ、ウィジャボード、
お願いだ、ウィジャボード
力を貸してくれないか
この世界のどこにも、居場所がないんだ〟
――モリッシー　『ウィジャボード、ウィジャボード』

一

廊下で一人の生徒とすれ違った。避けたと思ったのに、足りなかったらしい。互いの肩が存外に強く当たった。雪男の方は二の腕に相手の肩が当たって、結構痛かった。相手は痛みよりもぶつかった衝撃の方が大きかったようだ。床に鞄の中身と、抱えていた箱が落ちて、がたんと音がした。

「うわ…」

慌てて雪男とぶつかった相手が同時にしゃがんで荷物を拾い集める。

「すいません」

雪男が謝ると、いいさ、と気軽な調子で答えた。その相手を見て、雪男は少し驚く。女生徒かと思ったら、男子生徒だった。色素の薄い少し長めの前髪が面長な顔に一筋、二筋と乱れかかった顔は、男性的でもあり女性的でもあって、むしろ性別を超えてると思った。

「ナニやってんだよ」

ダッセ、とからかいながら、隣を歩いていた燐が雪男の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「ちょ、拾うの手伝ってよ」

任せろ、と答えた燐が、勢い良く散らばった教科書やノートを拾い始める。…って、おいい！　しっぽを仕舞え！　兄の気ままなしっぽが機嫌良さそうに左右に揺れる。雪男は床と燐と少年へと、忙しなく、それでもあからさまでないようにちらちらと目をやりながら、ふらふらするそれに今にも気付かれてしまうのではないかと、心配で気が気でなかった。そのフリーダムっぷりも好きだけどさ。少しは危機感とか覚えようよ。醐醍院と言う同級生にあっさりバラしたと勝呂たちから聞いたときには、流石に開いた口が塞がらなかった。暫くして相手が燐を受け入れたようだと聞いた時には、少しほっとしたけれど。全員が全員、彼や僕たちみたいに受け入れてくれるとは限らないんだからな。

ちらりとぶつかった相手を見ると、彼がふぅん、と物問いたげな顔で燐と雪男を交互に見ていた。ともすれば視界を遮った

りするそれを重点的に。
見られた。ざっと血の気が引いていく。
間違いなく、そりゃもうがっつりしっぽを見られてる。かなり整った顔をした少年は雪男の視線に気づいたのか、にやりと笑った。慌てた顔をしていたのだろう。そりゃそうだ。そりゃ、慌てもするよ。
一応ここはお金持ちの子息が集まると言う学校だ、人の悪い笑みだが、整った顔でそこはかとなく上品な感じも受ける。まぁ、僕が品とやらを正しく理解していればだけれど。二年生の襟章がついているのが見えた。
「コスプレ好きなの？　凄い精巧な動きだよね」
え？　何のことですか？　なんてヘタな誤魔化しをしながら、じりじりと兄の姿を、と言うよりしっぽを隠そうと動いた。燐が後ろ向きに下がってきた所に、どすんと互いの腰がぶつかる。
「イテーな、雪男」
「兄さんこそ気をつけなよ」
てか、しっぽ仕舞え！　じっと双子を興味深げに見る少年から隠すように、苛立たしげに床を叩くしっぽを引っ張る。あいてぇ！　と燐が声を上げた。このバカ兄！
「あの……、そちらの箱は大丈夫ですか？」
白々しいのは判っている。だけれど、無理矢理にでも話題を逸らさなければならない。五十センチくらいの真四角な紙箱で、厚みは二十センチ弱だろうか。ひっくり返って蓋の方がぐしゃりと潰れていた。
「ああ。箱くらい大したことないさ」
箱から薄い盤がはみ出していた。ボードゲームだろうか？雪男が足下に散らばった細長いカードを拾って、戯れにひっくり返した。
「タロットカード？」
「なかなか味のある絵柄だろう？　祖母の形見だ」
確かに少し黄ばんではいるが、細かに書き込まれた絵柄は美しかった。が、同時に少し禍々しい感じもした。
「なんだこれ？」
燐が手のひらがすっぽり隠れるほどの大きさで、少し厚みのある、ハート型の木片をつまみ上げた。ハートの真ん中には、丸い穴が空いている。
「これはね、プランシェット」
「ぷ……、プリンジェット？」
くは、と整った顔が笑い崩れた。しゃがみ込んだまま腹を抱えて大笑いする。声は人好きのする中々の美声だ。
「ふぅん、君、気に入ったな」
一頻り笑うと、すい、と長い指が伸びて、するりと燐の頬を撫でた。

「なんだ、お前」
　燐が驚いて少年の腕を掴む。いたた、乱暴だなぁ、と困ったような声で、そのクセ面白がったような顔をした。途端に雪男の頭の中で警告音が激しく鳴り響く。なんか知らない人に、こんなことを思うのは失礼だと思うけど、危険だ、この人。って言うか、兄さんに軽々しく触らないで貰おうか。
「荷物です。すいませんでした、じゃ、僕らはこれで」
　雪男が少年と燐の間に割り込むようにして、拾い集めた荷物を押し付けると、燐の腕を引っ張って慌しくその場から離れる。足早に歩きながら後ろを窺うと、彼は荷物を両手に抱えたまま、キラキラした顔で二人を見送っていた。
　ヤバイ、絶対ヤバイ。関わったら絶対ヤバイ。
「おい！　どーしたんだよ、お前」
　引きずるように引っ張られた燐が、訝るのと乱暴な扱いに怒ってわき腹を殴ってくる。
「兄さんこそ、気軽にしっぽ出してるなよ。今の人気付いてたよ」
　痛いな、と言いながら雪男もわき腹を殴り返した。
　兄は物凄く不満げな顔で、キュークツで嫌いだとぶつくさ文句を言う。弱点を無防備に晒しているということを、何時になったら自覚してくれるんだろうか？　後でお仕置きだからな。いろいろと。

＊＊＊

「ダイレーカイ？」
「降霊会！　死んだ人、つまり幽霊（ゴースト）を呼び出して、色々占うんや」
　きょとんとした顔の燐に、勝呂竜士が苛立たしそうに説明する。
「お前、祓魔師目指しとるクセにモノ知らなさ過ぎやぞ」
　常識やぞ常識！　とぶつくさ文句を言うのを、三輪子猫丸がまぁまぁ、と抑える。
「どうも学校内で噂になったはるみたいで」
　気になる噂がある、と勝呂、子猫丸が講義が終わった後で雪男に相談してきた。ごそごそと帰りの支度をしながら、皆が耳を傾けている。普段は協調性の欠片もない宝ねむまで、人形をいじりながらも、話を聞いているのが判った。
「雪男、お前知ってんのか？」
　黒板を消していた雪男は、いきなりだなぁ、と思いながら一応記憶を探る。降霊会、或いは幽霊に纏わるような通達や連絡があっただろうか？
「特に聞いた記憶はないな。その降霊会がどうしたんですか？」
　勝呂、子猫丸、志摩廉造が戸惑ったように顔を見合わせた。
「水野言う先輩ですけど」
　どうやって話そうかと言葉を選んでいるらしい。勝呂にして

は珍しく歯切れが悪い。
「人呼んで『正十字学園のアンタッチャブル』」
そんな気遣いを読んだのか、読まなかったのか。廉造が面白がったように言う。
「あんた……なに？」
「アンタッチャブル」
「……なにチャンプルーでもいーけどさ」
あっさりと投げた燐が先を促した。
「生徒会長とか、風紀委員ですか？」
清廉潔白、買収に応じない、カタブツ的な存在かと言う雪男の問いに子猫丸が首を振る。
「関わり合いになるな、言う方ですわ」
つい先ごろ似たようなことを思ったな、と雪男は首を傾げた。
「因みに、その一がその人で、その二が坊やけどね」
笑う廉造に勝呂がゲンコを落とした。
「どうせアンタみたいなガラの悪い格好でもしてるんでしょ」
「あ？　誰がガラが悪いて？」
「ピアスに髪の毛染めて、ガラが悪くないとでも？」
は、と神木出雲が鼻で笑う。
「これは腹括った言うケジメやケジメ」
「そこまでしなきゃケジメつけられないとか」
「二人とも落ち着いてください」
子猫丸と雪男が出雲と勝呂の睨み合いに割って入る。
「そのアンタッチャブルがどうしたんですか？」
「なんや、ムカつくヤツかと思うたんですが、違うみたいで」
それとなく周りに聞くと、二年の生徒で、ヘタに関わらない方がいい、と噂されているようだ。その理由を尋ねると一様に口を噤んでしまう。その本人もほとんど一人で、いつも学校の空き教室にずっと居るようだと勝呂が続けた。朝は一番に登校して授業が始まるまで。昼休みはもちろん、授業が終わった後は最終下校時間まで。人を遠ざけるようにずっとその教室に居るらしい。
「暗そうな奴やと思うたら、顔はエエんですわ」
廉造が気に食わない様子で言う。
「話したら爽やかやし。影で女の子がキャーキャー言うてはんねんて」
イケメン滅びろ、俺も女の子にキャーキャー言われたいわ、と廉造が悔しそうに言う。
「寮の廊下で、なんや絡まれとったんです。そこをたまたま坊が間に入らはって」
子猫丸の説明に、廉造がおっとこまえですなぁ、とからかった。
「やかまし」
「一丁前に照れないでよ。こっちが恥ずかしくなるわ」
「なんやと」